全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第1章「3・11」

6

「会社へ行く」言えず

防風林越えた大津波

津波で被害を受けた南相馬市の沿岸部＝2011年3月12日

3月11日、福島第1原発3、4号機作業管理グループの富田敏之(54)は休暇を取って、自家用車に妻と次女、犬を乗せ、仙台市方面へ買い物に行こうと国道6号を走っていた。激しい揺れに襲われたのは、相馬市の辺りだった。富田は車を路肩に止めて長々と続く揺れをやり過ごした。

「大きな地震でしたけど、原子炉はたぶん止まったと思いました。だから家族を自宅に帰すことが優先だと考えました」

自宅は第1原発の立地する大熊町で、ここから南に約40キロもある。富田は車をUターンさせると、来た道を戻り始めた。ラジオは津波警報を繰り返していた。南相馬市原町区まで来ると、海岸線の防風林がキラキラと光っていた。

「目の錯覚かなと思ったんですよ。きれいだなぁ、と。そうしたら次の瞬間、防風林の上から波がダーンっと。あんな大きな津波が来るとは思いませんでした」

車はたまたま小高い丘の上を走っていた。富田が車を止めると、丘を挟むように、水がものすごい勢いで南北の平地を流れていった。

水が引くのに約2時間かかった。そばにいた地元の住民に聞くと、この丘から車で移動するには国道以外にないという。富田は車をあきらめ、歩いて通れそうな場所を選びながら自宅を目指すことにした。

10キロほど歩いたところで自宅にいた長女に連絡が取れ、車で迎えに来てもらった。帰宅した時には日付が替わっていた。

自宅は停電で真っ暗。台所は割れた皿やコップが散乱していた。テレビもつかない状況で、原発がどうなっているのか知る手段はなかった。それにもうくたくただった。

「とりあえず寝よう」

富田が第1原発の異変に気づいたのは12日早朝、目を覚まして犬の散歩に出た時だ。大熊町の防災無線が10キロ圏内の住民避難を指示していた。

運転員としての経験が長い富田は当直長の資格も持っている。直観的に「冷却手段がなくなったんだな」と感じた。急いで自宅に戻ると家族を起こし、妻の車で近くの公民館へ向かった。険しい表情でハンドルを握りながら富田は考えた。1～3号機は運転中だった。詳しい状況は分からないが、現場はきっと大変な事態になっているはずだ。

妻と2人の娘を見ると、3人とも不安を隠せない表情だった。しばらく一緒に避難していようかー。そんな思いが胸をよぎった。

しかし…。

「会社に行かなきゃならん」。意を決して言ったつもりだったが、言葉に出せなかった。富田は家族を公民館に降ろすと、行き先も告げず第1原発に向かった。(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　前田有貴子)